

一高祭も成功裏に終わったようですね。一高祭では年毎のテーマを設定し、企画運営されるようになって久しいと聞きました。そして最近、地球規模・人類的な今日の課題を踏まえたものをテーマにしているとも。今年は、「煌～地球の、未来の、私たちの～」、昨年のは「PUZZLE～無限につらなる僕らのピース～」でした。今回は、在校生諸君の一高祭にあやかって、先輩たちのエピソードを紹介しましょう。

開花し始めたアカンサス ↑



創立2年目にして 早くも自主活動

土浦中学校は、茨城県尋常中学校土浦分校として明治30年(1897)4月本校舎もなく間借り状態、しかも教場も分散状態で開校した。しかし、生徒の自主的な活動は、その創立当初から極めて活発であった。分校創立の年、既に教師と共に家族的雰囲気の中でしばしば茶話会を催し、仲間づくりが進んでいた。同年12月には、乱暴な言い方であるが、今の生徒会に似た「進修会」(正確には後に紹介)を発足させた。創立2年目(明治31年)6月、1・2年生約200名の生徒が、自分たちの手で運動会をはるばる神

立原(註)で開催し、成功させた。これは、当初春に予定されていた運動会が翌年に延期された為、生徒達が自分たちで企画し開催したのである。野球2試合の後、「陸上ボート・載裏競争・フットボール(サッカー)」が行われたという。

更に秋にも生徒達の企画で行われた。最年長の生徒でも16歳、創立2年目と言えば、五里霧中の学校生活と想像しがちだが、見事なまでの積極的な行動力と実行力を発揮していた。

ヒョットコ事件

この行動力・実行力・創意性は、創立10年目の明治39年(1906)、思わぬ事件を引き起こすことにもなった。それがヒョットコ事件である。

当時の土浦中学校の運動会は、町と一体化した一大イベントであった。特に恒例の余興は人々の期待が大きかった。日本は、明治38年(1905)、ロシアに辛勝したが、大勝気分が冷め遣らず、翌明治39年秋、土浦においても町を挙げて戦勝会が行われた。このような雰囲気の中で、3年生は秋の運動会恒例の余興を盛り上げるための出し物は如何にと知恵を絞った結果、数日前に行われた戦勝会の山車を借りて引き回すことに衆議一

決した。借り受けに成功した生徒達は、学習をそっちのけにして、出し物の練習に精を出す一方、山車の屋根飾りにも種々の新たな工夫を凝らした。余興のシメを飾る3年生の「山車曳き」は、祇園囃しをBGMにヒョットコとおかめの踊り手、髪はボサボサで上半身を真っ赤に染め、真っ赤な大盃をもった「生き人形」を乗せて登場し、観衆の拍手喝采を博した。(写真右上・何分、百年前の写真なので不鮮明です。背後に新築間もない校舎の一部が写っています)かくして運動会は上首尾に終わった。

山車を返却するにあたって、お囃子も踊りも飾り付けもそのままに町に出て、再び人々の喝采を博した。生徒達は、町の人々からお菓子などをもらい、今日の成功を語り、満足して帰校した。

しかし、先輩たちからは「野蛮で下品、母校の顔に泥を塗った」と抗議を受け、警察は無届けデモをしたとして事情聴取に来た。後日、県議会は猥褻行為(当世流のいわゆるワイセツとは大いに趣を異にする)をなした等々と各方面から指弾を受けてしまった。

遣沢恒猪校長は、県議会沙汰になる前に、責めを負い辞表を出し、秋田県立大館中学校に転任し、甲・乙両組の担任も県外の学校に去った。しかし、これでヒョットコ事件が収束した訳ではない。

参加者たちの汚名返上と活躍

遣沢校長は離任式で『将来一新の機を開き、以て全般の風紀を刷新することになれば私は満足である』とだけ述べ、決別の辞とした。

事件を引き起こした3年生は全員叱責を受けたものの、特別の処分はなかっただけに、遣沢校長との土浦駅頭での別れには、声をあげて泣いたという。彼らは『将来一新の機』を胸中深く秘め、汚名挽回を志し、学業に励んだ。2年後、旧制一高・二高に一躍9人も合格し、志を果たした。

事件の首謀者、同級生は、陸軍大将、海軍主計大佐、早大文学部教授、順天堂大教授、日立製作所営繕部長、銘酒酒造会社社長、代議士、洋画家、医学博士等々とそれぞれの道で大成した。これを以てヒョットコ事件は名実ともに終結したと言えよう。

〔註〕神立原の正確な場所は不明だが、JR神立駅西口に近い県道沿いに「神立原」というバス停がある。この付近であったと思われる。